

聖霊シリーズ「知識の言葉」

1A 賜物の特質

1B 超自然に与えられる知識

2B 蓄えることのできない賜物

3A 新約の例

4A 賜物の運用

1B 預言と見分けの賜物との重複

2B 御言葉の取り次ぎでの例

3B 知識の言葉とは言えない例

本文

私たちの聖霊の賜物の学びは、コリント第一 12 章の「知識のことば」に入ります。「ある人には聖霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、(12:8)」とあります。私たちは前回、知恵の言葉を学びました。知恵は知識の適用であり、キリストの内に歩むことそのものが知恵であることを学びました。また、折にかなった言葉を話すことにより、対立や分裂、争いが起こりそうな時に本質的な事を語ることによって、両者を和解させ、平和になる実を結ばせます。

1A 賜物の特質

1B 超自然に与えられる知識

そして「知識の言葉」ですが、これは「超自然に与えられる知識」であります。普通に習得したり、学習によって得たのではない、上からの知識です。この賜物が顕著に現われた人物は、預言者エリシャです。神がエリシャに、超自然的に物事や人についての知識を与えられました。

ナアマンの話の結末のことを思い出してください。アラム(シリア)の將軍ナアマンがらい病に罹りました。エリシャのところにおいて、七度ヨルダン川に浸かりなさいと言われて浸かると、らい病が清められていました。彼は、癒されたことの謝礼に高価な贈り物をエリシャに渡そうとしますが、拒みます。しかし、エリシャのしもべゲハジがそれを由とせませんでした。彼はナアマンに追いつき、預言者の若者二人がやってきたので、銀一タラントと晴れ着二着を下さいと、エリシャが言っておりますと作り話をしました。するとナアマンは、「もっと持って行ってください」と言って、銀二タラントと晴れ着二着を与えました。そしてゲハジは若者も持たせて、そして自分の家にしまい込んで、それからエリシャの家に戻りました。

「2列王 5:25-26 彼が家にはいて主人の前に立つと、エリシャは彼に言った。「ゲハジ。あなたはどこへ行って来たのか。」彼は答えた。「しもべはどこへも行きませんでした。」エリシャは彼に言

った。「あの人があなたを迎えに戦車から降りて来たとき、私の心もあなたといっしょに行っていたではないか。今は銀を受け、着物を受け、オリーブ畑やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受ける時だろうか。」ゲハジは、先の贈り物を家の中にしまったのであり、オリーブ畑やぶどう酒、羊や牛、男女の奴隷を受けていません。これらは彼の心の中で、思い描いていたものです。これが知識の言葉です。

同じように次の章 6 章で、アラムがイスラエルと戦っていた時のことが書いてあります。エリシャがイスラエルの王のところを人をやって、「あの場所を通らないように注意しなさい、アラムが下ってきます。」と言いました。また他のところにもやって来ると告げたので、イスラエルの王はそこにも人をやりました。それでアラムの王が非常に怒りました。家来たちを集めて、「我々のうち、誰が、イスラエルの王と通じているのか？あなたがたは私に告げないのか？」と問い質しました。「6:12 すると家来のひとりが言った。「いいえ、王さま。イスラエルにいる預言者エリシャが、あなたが寝室の中で語られることばまでもイスラエルの王に告げているのです。」すごいですね、聖霊によってこれらの知識が与えられました。

2B 蓄えることのできない賜物

しかし、知恵の言葉の時と同じように、知識の言葉も自分のところに貯蔵することのできるようなものではありません。覚えていますか、知恵の言葉は「知恵蔵」のように蓄えることはできないことを話しました。多くの場合、自分で予期しない時に与えられます。自分が知識の言葉が与えられていると意識していない時でさえ、与えられます。ペテロが、イエス様を、「あなたは生ける神の御子キリストです。」と告白した時に、イエス様は言われました。「マタイ 16:17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」天にいます父が明らかにしたという、すごい啓示をペテロは受けたのですが、彼はそのまま素直に語ったのだと思います。このような聖霊の働きがあるのであり、私たちはこの方を仰ぎ見て、導きを待つ姿勢が必要です。

エリシャでさえ、知識の言葉を貯蔵することはできませんでした。シュネムの女に、男の子が与えられました。ところが、この子が父と野で刈り入れをしていると、「頭が、頭が」と言うので、彼は母親のところにその子を若者に連れていかせました。すると、母親の膝の上でなんと死んでしまったのです。彼女は、長年不妊で、それでエリシャの預言で男の子が与えられていたのです。それなのに、この子が死んでしまった。それで、彼女はすぐにろばに乗って、エリシャのところに行きました。エリシャはその時カルメル山にいました。彼女は到着するや否や、彼の足にすがりつきました。ゲハジが彼女を追い払おうとしたのですが、エリシャは言いました。「4:27 そのままにしておきなさい。彼女の心に悩みがあるのだから。主はそれを私に隠され、まだ、私に知らせておられないのだ。」エリシャは、いつも主に知識の言葉が与えられていましたが、このように主が示されないこともあるのです。

3A 新約の例

新約においては、どのように知識の言葉が現われていたでしょうか。イエス様は神の御子ですから、すべてのことをご存知ですが、しかし地上において人としての生涯を歩まれて、聖霊に満たされて、その賜物をお見せになっていました。イエス様は、ピリポをご自分に弟子としてついて来なさいと言われました。そして、ピリポはナタナエルを見付けて、「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。(ヨハネ 1:45)」と言いました。けれども、ナタナエルが、「ナザレから何も良いものが出るだろう。」と答えました。けれどもピリポが、「来て、そして、見なさい。」と言います。イエス様は、「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」と言われます。ナタナエルは、「どうして私をご存じなのですか。」と尋ねます。イエス様は、「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たからです。(48 節)」と言われたのです。これは知識の言葉です。

そして、有名なサマリヤの女とお会いになった時も、知識の言葉を用いられました。ご自身が生ける水を与えると言われていたのに、「そんな水があるなら、私が汲みに来なくてもように、私にもください。」と言って、一向に永遠のいのちのことを話していることに気づいていません。そこでイエス様は言われました。「行って、あなたの夫をここに呼んできなさい。」女は、「私には夫はありません。」と答えましたが、イエス様は言われました。「あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。(ヨハネ 4:18)」

そして、使徒の働きにおいて知識の言葉が用いられているところを見ることができます。アナニヤとサツピラが自分の土地を売って、その代金の一部を自分たちのところに残したまま、これが売った代金の一部だとして偽りました。そしてペテロがいいます。「5:3-4 アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」代金の一部を隠し持っていたことを、ペテロは聖霊によって示されていたのです。ちなみに、ここでの問題は彼らが全てを捧げなかったことではありません。それは全く自由でした。全てを捧げたと偽る、その偽善が問題でした。

そして、サマリヤにおいてピリポの伝道によって、多くの人々がイエスの御名を信じました。そして、エルサレムからペテロとヨハネが来て、彼らのために祈り、手を置きました。聖霊を受けるためです。以前、学びましたね、イエスの御名を信じれば聖霊は内に住んでくださいますが、それ以外に、上からの力、聖霊のバプテスマを受ける約束が信者には与えられています。それで、彼らは聖霊が与えられました。預言だったのででしょうか、異言だったのででしょうか、はっきりと目撃できる徴が伴っていたのです。それを魔術師シモンが見ていました。彼も水のバプテスマを受けていました。けれども、ペテロにこう尋ねるのです。「8:19 私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい。」

しかし、ペテロが答えます。「8:20-23 あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません。あなたの心が神の前に正しくないからです。だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいることが、私にはよくわかっています。」シモンの心に、苦い胆汁があることをペテロは示されていたのです。これが知識の言葉です。シモンが、聖霊のバプテスマを受けるのではなく、それを授けることができるようにそれを金で買おうとしています。これは彼が魔術師だったからです。自分の魔術あるいはいわゆる手品の種明かしを、お金で売買するという習慣があったのでしょう。そして、自分のしていることよりも、多くの人がいエスを信じ、いろいろな大きな業を見ていたからです。それで苦みを抱いていました。このことをペテロは、霊で知ったのです。

使徒パウロにも、知識の言葉が与えられました。カイザリヤから、ローマに向かう船が遭難しました。けれどもパウロが警告していました。「27:10 皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます。」パウロはこう言ったのですが、航海士や船長は航行することを決めていました。それで百人隊長が後者を信頼することに決めたのです。ところが、パウロの言う通り遭難しました。そしてパウロは、もう絶望しかけていた彼らに対して、励ましの言葉を与えました。「だれも長いこと食事をとらなかったが、そのときパウロが彼らの中に立って、こう言った。「27:21-22 皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです。しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。」船の行く末についての知識が与えられていました。

4A 賜物の運用

私の妻に、知識の言葉が与えられた経験を思い出します。1994年に、ビリー・グラハムによる伝道大会が東京で開催されました。そこで妻がなぜか、語りかけを受けます。「チャック・スミスのところでわたしから教えを受けなさい。」同年の9月に、教会を訪問しました。そして、スクール・オブ・ミニストリーの授業を計画しました。そして、その年末に退職届けを私は出しました。そして、引越し荷物もカルフォルニア向けに送りました。住んでいたマンションも引き払い、ウィークリーマンションに住んで、1995年1月末に立つのを待っていたのです。ところが、手紙がカルバリーチャペル・コスタメサから来ました。スクール・オブ・ミニストリー校長の秘書からですが、「あなたは受け入れられません。学校が継続しなくなるからです。

教会は、山にバイブル・カレッジという聖書学校があるので、そこにも申請してみなさいということので、申請しました。けれども私たちは、「チャック・スミスの下で教えを受けなさい」という示しがあったので平安がありませんでした。ついに、教会の向かいにあるアパートを借りたのです。スクール・オブ・ミニストリーは存続する、と校長先生から直接聞きました。けれども、バイブル・カレッジ

に電話すると、「なくなる」と言うのです。結果、存続した訳です。

1B 預言と見分けの賜物との重複

こうやって見ていきますと、知識の言葉は、しばしば預言や見分けの賜物と重複する部分があります。パウロが、遭難しそうになった船で、「一人たりとも命は失われません、失われるのは船だけです。」という知識の言葉が与えられたが、それを他の人々に宣言したことによって、預言となっています。使徒ペテロが魔術師シモンの心が苦みの胆汁に満ちていたことは、知識の言葉ですが、霊を見分けたととも言えます。シモンが、「聖霊の賜物が授けられるように、買いたい」という外見上はちょっと貪欲なのか、あるいは霊的知識に不足しているか？という感じですが、苦い胆汁という霊的問題を見分けていたのです。

2B 御言葉の取り次ぎでの例

この知識の言葉の賜物は、御言葉を取り次ぐ時にしばしば用いられます。聖霊の導きがあるようにという祈り心を持ちながら、説教に臨みます。原稿を用意する時にも、それは与えられ、また説教中にも、原稿で用意しなかったものも語るように促されることがあります。そして、説教をしている時に必ず起こることは、「そのまま聞いている人の状況に合う」ということです。これは、頻繁に起こります。自分は前もって、聞いている人々の情報を持っている訳ではないのです。ただ、自分が、「これであれば、この本文箇所で書かれていることを分かり易く説明できるだろう。」と思って、それを使うのです。聖書の他の箇所の例であったり、そして実際の生活の場面を一つの仮定として作る時もあります。

すると、なぜか「それは、私に対して語られたものです。」という話を聞きます。私はその人の状況を知らないのです。でも、学びの準備をしている時に知識の言葉が、私も全く意識することなしに与えられているのです。しばしば、「ありがとうございます、すばらしい御言葉でした。」という感謝の言葉を頂くのですが、私はその人のために一生懸命考えて、それでこしらえた訳ではないので、お門違いだと思うのです。聖霊が知識の言葉をただ与えておられるのです。その反対もあり、ものすごい反発を受けることもあります。私が以前、仏式の葬儀において、ビジネスとなっているという話を、宮清めのところから話したことがあります。聞いていた未信者の伯父が、お坊さんだったそうで、私に後で謝罪をしてほしい、説教で訂正をしてほしいと言われました。私は、そんなことは知りません、一般的な話をしただけですから。

知識の言葉について、その取り扱いが難しいことがあります。ある人のことについて、自分に知識の言葉が与えられました。それが、具体的なことである場合もあります。その人の罪の生活かもしれない。何らかの悪事かもしれない。それが示された時に、どうすればよいでしょうか？そのまま話せば、噂話になってしまうかもしれません。祈ります。執り成して祈るためだけのために、与えられた言葉なのかもしれません。

3B 知識の言葉とは言えない例

そして、知識の言葉とは言えないのではないかと感じてしまうものもあります。聖霊の働きを待ち望む集会で、ある人が、「ここに意気消沈している人がいます。病気にも罹っています。」と言ったら、如何でしょうか？これは、一般的過ぎて、誰にでも当てはまるものです。そういうこともあるでしょう、けれども、そうでない場合もあります。

ぜひ、この知識の言葉を求めてください！私たちは聖霊に満たされることを祈り、そして自然に話している時も主が何を語っておられるか敏感になってください。御言葉にしっかりつながってください。そこで自分が何気なく語る言葉が、実は知識の言葉なのかもしれません。それを聞いて、悔い改めるべき人が悔い改めるかもしれません。そして、ある人について何か知識が与えられたとします。そして、主に対して必死に祈ります。すると、その人が残念ながらその通りになってしまうかもしれないし、主の憐れみによって罪の縄目から救い出されるかもしれません。そして、これは聖霊が与えてくださるのですから、自分自身がやっているという意識がありません。この時に主をほめたたえ、私たちに栄光を帰さないのです。